

と云事ハ碧巖集*1ニ臨濟正宗の文有ニ據りて宗派の正統の義を明す物歟 洞春ハ贈三位元就卿の法諱也 彼郷の修福の為造建せらるゝ所也と云云

【43頁】

楼門

南面之寺地 山麓の平なる所を用ゆ 故ニ石の鳶

【42頁】

齒*2を登る事三十歩計 楼上ニ額アリ 妙高臺と云々 楼門の内の中央に正宗山洞春禪寺の額を掛 楼門の左右回廊アリ

額殿本尊 十一面觀音大士

脇士 不動明王

本尊を正面に安置す 殿に額有り 方丈の二字を

影筆 殿の東の方に開山嘯兵大禪師の像を安置して前面に牌を立ッ

本願殿

贈三位大江朝臣元就卿の壽像を安置する所也

抑 彼卿ハ備中介本主朝臣の苗裔治部少輔大江

【44頁】

弘元朝臣の男也 天文二年九月廿五日叙爵 同廿六日任右馬頭 永禄三年二月任陸奥守 尋 除從四位下ニ 元龜二辛未年六月十四日卒ス 行年七拾五歳 法諱日頼洞春大居士 同三年四月ニ勅溢*3スト 贈從三位云々 武を以て家を興シ 文を以て国を治る事十州 備中安藝周防長門因幡伯耆出雲石見隱岐*4 五ヶ国 美作伊豫讃岐豊前筑前 世に十五州の守 中国殿と云事ハ 軍艦ニ見 日本六拾州の四分の一を持つ 誠に絶世の英雄也 彼卿の詠草跋に鎮西の主毛利奥州守元就と書 抑わかミかと六十余国の中ニケ一を平らけらるゝと紹巴法眼*5の記せるも 爰に出たる

物歟 今に当家を指して中国殿と名を呼ぶ事ハ其遺事也

撰津大坂の八当家をさして中国殿と云日本に 周防長州米を売て中国米と云事古来より今世ニ及ぶ

*1 碧巖集 碧巖録(きざんろく)のこと。中国の仏教書。別名に仏果園悟禪師碧巖録。碧巖集とも呼ばれる。特に臨濟宗において尊重される、代表的な公案集。全10巻。

*2 鳶 齒(がし)。「鳶」は「雁」の異体字。橋のきざし。雁の列や人の齒並びのように、材木が食い違つて、並んでいるところからいう。雁木(がんぎ)。

*3 勅溢 〓?

*4 十州 〓毛利氏では九カ国(周防、長門、石見、出雲、隱岐、安芸、備後、伯耆、備中)を「八カ国」と呼んでいた。

*5 紹巴法眼 〓里村紹巴(さとむらじょうは)は(大永5年〜慶長7年4月14日)戦国時代の連歌師。里村姓は後世の呼称で本姓は松井氏ともいわれる。号は臨江齋・宝珠庵。奈良の生れ。連歌を周桂に学び、周桂の死後里村昌休につき、里村家を継いだ。その後公家の三条西公条をはじめ、織田信長・明智光秀・豊臣秀吉・三好長慶・細川幽斎・島津義久・最上義光など多数の武将とも交流を持ち、天正10年、明智光秀が行つた「愛宕百韻」に参加したことで有名。本能寺の変後、豊臣秀吉に疑われたが難を逃れた。40歳のとき宗養の死で連歌界の第一人者となるが、文禄4年豊臣秀次事件に連座して近江国園城寺(三井寺)の前に蟄居させられた。連歌の円滑な進行を重んじ連歌論書『連歌論書』を著したほか、式目書・式目辞典・古典注釈書などの著作も多く、『源氏物語』の注釈書『紹巴抄』、『狭衣物語』の注釈書『下紐』などが現存している。

前將軍家御位牌殿

客殿の西に有 前征夷大將軍秀忠公已下の先君の尊牌を安置し奉る所也

東照宮神殿

客殿のヒツシヤル坤の方に阿り 東照宮大権現を崇め祭る宝殿也 鎮座以来日暮の祭祀絶る事なし

要害道番所

洞春寺より東の方に在り

【45頁】

屋敷一ヶ所

洞春寺の下に阿り

磯之番所

洞春寺の道より下

妙玖寺 号金城山

洞春寺西の山に阿り 当寺ハ往古安藝の国高田郡吉田村に阿り 衡陽慶浦大禪師を開山の祖とす 後に慶長十七年藝州より此地に移して建立、阿季 山号金城と云 弘法金陽第一巻に金城湯地の文有に據て號す 寺ハ妙玖大姉の法諱を以て名とす 大姉は元就

【46頁】

公室 吉川興恒*1女にして隆元朝臣の母 輝元公の祖母也

客殿本尊

脇士

釈迦文佛

文殊大士

普賢大士

殿の側に本願大姉の靈牌有り

妙玖寺櫓

寺の西に阿り 故に此名有

俗千先櫓ト云

郭中

事物紀原云 内ラ曰城ト 外ラ云フト郭ト云々 郭中の封疆天止門の内を云 三の郭左半之と云り 是ハ二の丸を二の郭とも

惣

【47頁】

いへる其義に對して云所也 世に丸と郭と通して称とす 一に堀内とも云 堀内とハ封疆の門外に幾保利有り 世に利保と下略して称す故に幾保利堀内の名阿り 俗に堀の字を用ハ非也 和名鈔云幾保利堀四声 字苑ニ云遠ル城ヲ長水ノ堀也 七膽ノ反和名保利等 今案る和名鈔の説ハ幾保利堀城を遶る水堀をのミニ云るに似たり 城郭ならでも堀とも云成べし 西域記云 頽牆クズシカキ埋ウズメ堀ウズメ 廢シ獄ヲ寬ワカフスト刑ナシ云々 是ハ囚獄門外の堀なり 史記匈奴傳曰 灋ハ谿谷ト云々 是に準ナラフへなるべきか

*1 吉川興恒 吉川国経。次郎三郎、治部少輔、伊豆守。

深野町

城の西南に浜手に有り 往古此所に深野 某^{ナニガシ}居住せし故に此名を呼ぶ 其裔孫今に市中に住し奕世市長となれり 此濱

【48頁】

獵人町也 是を小畑の浦へ引せ今浦と名^{ナツ}ケ 跡ニ御弓之者を置 其後吉川家江興入之時 御付の物ヲ被置^ニ付 又弓物を北の濱江移 是を今ハ新町上中下之三町と云 享保年中ニ益田就高*1職役之時 木屋奉行児玉十兵衛ヲシテ松を多く植ル并 新堀土手松植ル職役益田氏同十二年安養寺脇より日野 殿脇江中道出来 職役毛利筑後*2 同十二年唐樋札場後に 板橋ヲ掛ケ新道出来たり同断

【50頁】

朝臣吉川家続し給ひて世に吉川と号ス 周防玖珂郡 岩国と云所を領し給ふ故に岩国屋敷鋪と云也 抑^{ソノモト}元春の室は熊谷信直の女也 嫡男元長ハ天正十五年六月五日 日向にて軍中に病死 次男元氏^{繁沢ト稱ス}主仁保・三浦・北殿三家を續^ツリ 三男廣家元長の家領を續^ツク 内室ハ宇喜多宰相 秀家卿の姉なり 天正十六年七月被任侍從 慶長五年入道 して安亭如兼 又庵号ハ益庵如券と云々 寛永二年九月 廿一日率ス 法号中岩^巖如兼 行年六十五歳と云云 其子広正^{スシ}主

深野町口門

深野町渡し

深野町の渡しハ深野の南 岩国屋敷の西^ニ有^{時鞍門より去事 八丁三拾間} 其順 路ハ故天樹院ノ門前通り蓮池の南に行 岩国屋鋪脇通り 西江經過して渡口ニ至る 是より船にて玉江江傳ふ渡り也

【49頁】

岩国屋鋪 深野町の南に有り 侍從廣家朝臣の亭也 彼朝臣ハ 元就卿の二男從四位下 行駿河守 元春朝臣の子也 元春

【51頁】

無名町 岩国屋鋪の北 深野の南 東西へ豎筋にして其名なし 傳領有り 御内室ハ 輝元公御息女御輿入是を御 屋鋪と云 從是後岩国屋鋪を御屋鋪と呼ぶ 曲尺町 深野の東 名無町の北 丁の形 大工の曲尺^{カネジャク}の如し 故ニ此名を 呼ぶ 就久*3主亭 元ハ本町の福原の亭の東隣ニ有しか 後ニ 爰に移す 就久主ハ大藏大輔の裔也 元康朝臣ハ元就 卿の七男也 故に七郎兵衛と号す 從五位下ニ任シ大藏大輔を 領す 武名最高にて朝鮮在陣に度々軍功有り 秀吉の感状 数通に及へり 廣嶋の地ニ元康橋と云も此朝臣の宅前の

*1 益田就高 寄組益田家 織部。益田就貴二男。享保五年七月十八日から同七年六月十六日まで当職。

*2 毛利筑後 毛利広政。右田毛利家。享保九年一月十二日から同十五年二月四日まで当職。

*3 就久 厚狭毛利家、毛利就久。実右田毛利別家毛利八郎左衛門雅信次男。

橋也 今に其名を称す

財満門筋

蓮池の南 岩国屋鋪の門前南北通路の町を云り 此町の南の川端ニ財満門と云名有り

財満門

岩国屋鋪の巽に在り 時鞍門を去事六町四拾間 其順路ハ舊天樹院ノ門前を西に折て四本松を過キ蓮池の頭を南に財満門筋を行詰る 元此門脇ニ財満就久居住して此門を預る故に此名を呼ふ

四本松

當城の大手東西の芝生を云 此地ニ往古より大木の松四株有

【52頁】

今に現存ナリ 故ニ此名を呼ふ 出火の節殿動遊之時ハ城番与圍居を立テ爰に伺ス 又城内出火之時ハ 添番与爰に伺ス

殿在国六城番ノ者城内ニ入

大手の見付ニ腰掛馬立出来于時寛延元年十一月より同ア二月出来又又福原福原屋敷トツナキ出来又同時ニ

【注】割注三行目の「福原」は衍字

【54頁】

蓮池 四本松の南に有 此池に紅白の芙蓉を植られて今も花葉蔓々たり 故に此名を呼 古老云 此池元ハ二の丸の数寄屋の池へ通して長水なりしを 城を築るゝ時 埋むるに土砂人力に

堪難して 曲輪を内へ折入れられしに依て埋め残されし池今ニ存在せし也

長府屋敷

【53頁】

蓮池の東隣に有り 宰相秀元卿の亭也 当国豊浦郡に所領有て 府中に住す 故に此号有 此号ハ元就卿の六男伊豫守元清朝臣*1の子也 始は輝元卿狼子とし給ふ 故に官位の昇進も他ニ異り参議従三位に進ミ給へり 行年七十三歳にして慶安三庚寅年間十月三日卒給ふ 法名功山玄譽大居士号知門寺殿 其子 和泉守光廣へ朝臣より従四位下侍従 綱元朝臣に傳り 右京元矩主享保三戊戌年二月廿日早世于時十五歳 息子 なかりければ 嚴法據に非ず 家督断絶に及へり 同四月十三日配与の地を本家に還附の台命有り 爰に豊浦清州清末なり の領主讚岐守匡平朝臣後改匡廣 秀元卿の庶流なりしに 本家の与奪に依て知行増長の台命を得て新に長府領を配与し給ひ 府中の館に移り 先主の祭礼元の如し 抑匡廣朝臣の父刑部少輔元知朝臣ハ宰相秀元卿の庶子也 故に長府領之地を分配有て 清末を領し給ふ

*1伊豫守元清ニ毛利元就四男が正しい。長府毛利家の祖。

【長府毛利家略系】元清―秀元―光廣―綱元―元朝―元矩―匡廣―師就―匡敬―匡滿―匡芳……(元朝は綱元の子吉元の長男であるが、吉元が毛利本家・吉廣の

養子となつた為、長府毛利家の家督は綱元四男元矩が継いだ。しかし、元矩は無嗣子につき、一旦家系断絶し、その後を清末毛利家元知二男元平、即ち秀元の孫、後改め匡廣が継承した。

佐々木殿町

財満門筋の東 長府屋敷の南に有り 東西の豎町也
爰に佐々木源氏居住せる故に 此名阿り 彼佐々木氏ハ出雲
州尼子義久朝臣の嫡流也 富田落城の後 尼子三兄弟
藝州長田村に圓妙寺といふに適居*1して年序を経るの
後 藝州の内久佐と云所に住居して内藤預る 慶長の

【56頁】

比コト 尼子の家名を改めて久佐と号す 義久朝臣入道云の
弟倫久入道云の子息九郎三郎元知を義久朝臣友林の養子
とす 姓名古きに復して佐々木と云 彼義久朝臣ハ六国
因幡 出雲 隠岐 伯耆 石見 安藝の守也 慶長十年八月廿八日長州阿武郡奈
古村にして卒ス 国の人往事を貴みて佐々木殿と云り 今も
其嫡流の孫子傳領して爰に居住せる故に 此町の名
とせり

無名町

財満門の佐々木殿町の南に阿り

西廣小路

四本松の南 長府屋敷の門前 北の横乃路筋をいふなり

【56頁】

郭中の内 東大馬 西廣小 小路の幅廣き筋 両所に抛りて

西廣小路の名阿り 今案に路の廣狭に随て大路小
路の名に差別有り 世に広小路の字を用 小ノ字
穩當ならず 廣六の字にや尋ね問ふへし
右ハ西廣小路筋より西の分を記ス 已上の諸所ハ横豎
の道路方直ならず故に 甚方角の便に随ひて 是を
書し訖ぬ 是より以上ハ異なる者也

潮留門

時鞞門トキウヂの東 藏元の前に在ル所の海面の門を云り 三重
櫓の下の溝川阿李 海に續きて潮水の通路すべ
きを塞き留たる故に此地の名とし 門も其名ヲ称する所也

【57頁】

外下馬

時鞞門トキウヂ・塩留門シホドメの門堀前也 腰懸と名付け阿り
此所家中の諸士鎗・籠・馬等の立場也

藏元

防長之府寮也 諸吏爰に集會して国中の政
務を施行す 藏は府庫をさして云り 元ハ根元也
府庫の根元といへる意にて云 申人君體スト元以テ居ルニ
正ニ云々 蓋此本文に抛れりと云々 爰には合さる事にや
此意ハ 人君立ル 極ヲ改年ヲ曰元ト 毎歳首月ヲ曰正 此ノ義か
但元ハ天地人共ニ有り 子華子*2曰 元ハ太初ノ中氣也 天帝

*1 謫居ニ(たくきよ) 遠方に流されて住むこと。また流謫(るたく)の住居。

*2 子華子ニ 中国戦国時代の道家。最後の「子」は「先生」の意。(或いは、司馬芝の事か。字は子華。後漢末期から三国時代の政治家)

【58頁】

得^テ之運乎無窮^ニ 后土得之傳無疆 人之有元百體
■焉云々 何れの説に因ても元の字を用る事難なる

べきにや 此藏元の内に有る諸役所を或は所と云^{郡奉行と云類なり}
或は方と云^{銀子方米方} 各共一事を務る也 所謂所は字彙曰
處^所也と云々 御書所・作物所などいへる此意なるへし 又方ハ
所也 **易**云 君子^ハ以^テ情^ヲ辨^メ物^ヲ居^ル方^ニ本義^ニ云各其所云々
居所をいふ也 又方^多士^加と両節両字を用ゆ 一説居所を
さして云時^ハ方^ノ字を用ゆ^{銀子方と云是也居所ノ心也} 一説吏人おさして
いふ時は士^ハの字を用ゆ^{與服方といふ是也} 占士^{ソマカタ}と云かことし

松原口門

藏元の東に有海表の門を云り 往古ハ此所より東^{行程カ}へ衍程
壺里^{バカリ}計松原也 是を阿武の松原と云り ^{本書に原の松原と有り} 太守
秀就公初御入国の時の哥^ニ曰 益田三左衛門藤原

【59頁】

^{長門なるノ五文字不審}
長門なる阿武の松原ふミ超て 指月の月を跡に見んとは

此松原慶長年中に大井村の濱に移す 今又享保年中
太守吉元公命職役浦図書平元敏^ニ此濱に松^ヲ令^セ
植^ウ 沖より景色他に異也 又北風の便を得て所の者^ハ歡ふ

事見郭

大助^{コヤ}鋪^ヤ ^{俗用大木屋字}

【60頁】

松原口の門の東に阿り 此所ハ城中より郭外の所々の殿舎・
宮・寺・橋等の修造の事を務とす司家也 木工・鍛工等
乃工人の居して其役を勤る家を四方に作れり 其家
作りの形を以助鋪^古と云也 俗に木屋の字を用ゆるハ
誤り也 大と称することは広大なるを以て云所也 作事方とも云り

和名鈔云 辨[■]立成云助鋪^古 ^{比大岐夜} 一云 如衛土屋也
右已上海面に門戸を開く所也

高句麗^{コクリガ}峠^ト筋

四本松の東 藏元の後町の筋を云り ^{高句麗峠と}
專に称する所は松原口の門の東西を称す 今其
前後を差て惣号とする所也 ^{高句麗峠^{古久利加}と}
いふ事高句麗^{古久}の賊 此所に襲来せし故に此
号有と云云 異賊襲来の年月詳かならず

益田屋敷

高句麗峠の東の端にして封疆の脇に有り 益田
元道主の亭也 当家ハ石州益田の城主にして 右衛門佐

【61頁】

藤原藤兼入道全鼎の子息從五位下玄蕃頭元祥

の後胤也 藤兼は始祖より**奕世**^{エキセイ}***1**益田を傳領して
大内に属シ弘治年中に 元就卿の旗下に参してより
今に至れる所也 元祥内室ハ吉川元春の息女也 後に
長州阿武郡の須佐と云所に領して剃髮して牛庵
と号す 寛永十七年九月廿日に行年八十三歳にして率す
後裔孫傳領今に至る所也

天樹院旧地に今ハイヅカ有

四本松の東 高句麗埤の南に阿り 此地は先中納言
家の別業***2**有しを彼卿御卒去の後 寛永貳年に
此殿舎を用ひて寺として天樹院と号 平安寺乃

【62頁】

長老を以て住持職とせり 則彼卿の法名を用ひ
奉願所也 天和貳年火災有て此寺も類焼せり 其時に
雲溪院へ移し後に桜山の麓にして新に寺を建つ
今の天樹院
是なり 今も此地二旧跡有り

北の町筋

高句麗筋の南 四本松の東に有り 此道六寺町の北に
有て此名阿り

【63頁】

本町筋

北の町筋の南に有り 中の門筋にして当城に至ルの順路
なり 故に本町の名阿李

完戸屋鋪^ホ

本町の南側 西廣小路の角にあり 完戸廣恒の亭なり
当家ハ安藝守隆家朝臣の嫡孫從五位下備前守
元續朝臣の後裔にして其嫡流傳領の所也 隆家

朝臣の室は 元就公の嫡女号妙寿也 完戸ハ清和源氏

桃霰國の宮貞純親王***3**之裔にして 家紋の六須波摩字ハ六孫***4**

經基の六の字を用ユルと云り 一云ウ六の字ハ分けて杏・冠共に
用ひて洲濱スズノハマの紋を制す 今洲濱に両様有ハ是也 元續
朝臣寛永八年七月廿五日卒去 法名玄叟道居士***5**と
云云 此地今に嫡流に傳ふ所也



洲濱

*1 奕世 (えきせい) 代々、累世。

*2 別業 (べつぎょう) 下屋敷、別荘。

*3 貞純親王 (さだずみしんのう) 貞観15年(延喜16年5月7日)は平安時代前期の皇族、清和天皇の第六皇子。母は棟貞王の娘。王子に經基王・經生王がある。桃園親王とも。親王任国とされる上総や常陸の太守や、中務卿・兵部卿を歴任したが、位階は四品に留まった。經基・經生の両王子が共に源姓を賜与され臣籍降下したことから清和源氏の祖の一人となった。

*4 六孫源經基。源經基(みなもと)のつねもととは、平安時代中期の皇族・武将。經基流清和源氏の初代。『保元物語』によれば、父は清和天皇の第六皇子貞純親王で、母は右大臣源能有の娘。皇族に籍していたとき「六孫王」と名乗ったとされるが、当時の文献には見られない。居館は六宮とも八条御所ともいう。

*5 玄叟道居士 六戸元續の法名は正しく巖叟道嶽。

福原屋敷

本町の北側 完戸屋舗の向に阿り 従四位下越後守大江

【64頁】

廣元二男長井一流にして藝州高田郡福原邑に住居す 故に郷邑を以て家名の称とす 廣俊朝臣は元和九年 三月廿一日卒す 其子孫に今傳領す

天野屋敷

本町南側完戸屋敷東隣に阿り 毛利廣政主ヌシの亭也

当家ハ 元就公六男従五位下讃岐守藤原元政朝臣

乃後胤なり 元政ハ天野民部大輔ノ養子と成 天野家ヲ

續ク 抑ソノモト天野家は正四位上藤原遠景朝臣の苗裔也

遠景の事ハ委東鑑に見えたり いみしき武士にして右大将

家*1の命を啣フクミテ九州の逆徒を始メ高麗国へも渡り

事故なく凱陣せし由 古今著聞抄*2に見へたり 元政朝臣

【65頁】

も武名高く慶長拾四 四月廿九日ニ卒ス 行年五十一歳 天徳 寺殿と号 元政之子元俱の代に至り天野を改毛利ニ 周防熊毛郡三ツ尾を領し 後ニ佐波郡右田ニ移り彼所に 居住ス 其裔孫今に傳領所也

大田屋敷

本町の北側 福原屋舗の東隣に阿り 従四位下侍従 久留米秀包朝臣の長子元信主の亭也

繁沢屋敷

本町北側松原口筋の東角に阿り 吉川元春之中子宮内 少輔元氏の亭也 此主三浦・仁保両家の家督にて北殿 福屋の知行ヲ被領 後仁保と号シ又繁沢と号す 故に

【66頁】

庶家ノ人多クハ繁沢と名乗 元氏長子元景繁沢を改ム

毛利ト 長州大津郡阿河アガと云所を領し 今に傳ふる所也

吉見屋敷

本町北側の東 大馬場の脇に阿り 委しき事有とも 不記候

南の町

本町の南に阿り 義ハ北の町と同じ

無名町

南の町の南オイヤシ 逐回*3の北ニ有 此町の堅路三丁名無し

逐回*3

無名町の南 平安古堀土手の内ニ有 此地封疆の脇に馬場

*1 右大将ニ源頼朝。

*2 古今著聞抄ニ(こんちよもんじゅう)は鎌倉時代、伊賀守橋成季によつて建長六年(1254年)編纂された世俗説話集。七百余りの説話などを神祇・釈教・政道忠臣・公事・文学・和歌・管絃歌舞・能書・術道・孝行恩愛・好色・武勇・弓箭・馬芸・相撲強力・書図・蹴鞠・博奕・偷盜・祝言・哀傷・遊覧・宿執・鬭争・興言利口・恠異・変化・飲食・草木・魚虫禽獸の30編にまとめたもの。

*3 逐回ニ(おいまわし)現在の地名は「折廻し筋」

【67頁】

有り 其道曲折にして馬を牽廻す故 余^世之俗に馬を牽を

馬を逐と云へなり 馬を逐と云事も有なり 易^三云 良馬逐^{へり}
大番 九三 と云々

明倫館

逐圃の馬場の北側に阿り 享保年中^二当国六吉元公大
内の例を以 学校に擬して造建せらるゝ所の学館なり
東西に学寮を造りて書生を置いて文を講す 南北に
館舎を建て諸士に命して武を校へしむ 国中の老少貴
となく賤となく席を共にし講習日々に怠事なく
万人国君の恩沢浴する事大なるもの也

【69頁】

文宜王四配^{顔子曾子}之木主を安置*1する殿有 春秋に
釋奠*2す 祭法^宋儒の儀を用ゆ 文人文を講し 伶人*3
楽を奏す 祭日は^義狼老の事有り 三更五老*4の義を用ゆとなり

学寮

講堂の西に有り東西を分かつてり

劍術場

俗^三新信場と云り 容衆門の東^三有り

鎗場

容衆門乃西に阿り

容衆門

明倫館正面の一之門也 門の上に額有 容衆の二字を彫たり

手習場

鎗場の西に在り 諸士此所にて筆道を学ふ

【68頁】

講堂

二の門を入れて正面に阿り

諸禮所

手慣場の西 弓場殿の内に阿り 此所にて諸家の礼式を
学ふ所なり

大成殿

弓場殿

*1 文宜王四配孔子の木主之木主を安置^二中央に木成至聖文宜王木主(孔子)左右に顔、曾、思、孟の四聖の木主を安置して孔子一門の牌を安置した。

*2 釋奠^二(せきてん)孔子及び顔回以下の十哲を祀る儀式。

*3 伶人^二(れいじん)雅楽の職業的楽人の呼称。

*4 三更五老^二三老五更の誤記。中国、周代に、天子が父兄の礼をもって養った長老のこと。天下に孝悌の手本として示された。徳の高い長老のこと。「三老」は三公にあつたものが引退の後に三老として尊ばれた。「五更」は卿の位にあつたものが引退後は「更」として尊ばれた。三公・五更はともに中国周時代の長老の称である。それ以外の一般の老人は「群老」と呼ばれた。《出典》礼記「文王世子」

諸禮所の北に阿り

平安古口門

逐田オクイノシの東 春日門前ヒツジサルの坤ヒツジサルの方に当りて時鞍門トキウチを去こと
拾町阿り 此門平安古町の口に有故此ノ号有リ 又南の

【70頁】

門とも云南東北ニツノ門手廻り足輕六与ニノ番を勤
暮六ツヨリ明六ツを切手詰ニノ通路

*1

春日馬場

平安古口門の東 大馬場の西に阿り 封疆の端の東西の
順路と云り

養岳院

春日馬場筋の西 平安古門筋ヒツジサルの坤ヒツジサルの角に阿り 此地
往古の平安寺の旧跡なり

本尊

大日如来

愛宕堂 *2

所祭

阿當護神

一座

神像愛宕権現垂迹本地勝軍地藏

【71頁】

右慶僧汰師勸請の義に被敷 当堂六城州愛宕

山福寿院ノ別院也 当寺より福寿院へ對して證文数通有
鎮主小社 菅相國

妙悟寺

養岳院の東隣に阿り

本堂

本尊

千手観音

位牌堂

本尊

聖観音

春日神社

當社ハ大同年中に大和国三岳山よりニツ森の地ニ移す
年月詳ならず 慶長年中ニ又今の地に遷座阿り
当所の宗社とす 是迄ハ吉屋某社家とす 是より大宮司

【72頁】

波多野氏なり

本社五座

所祭神

建甕槌命タケミカツチ
アメノコヤネノミコト
天兒屋根命イワイズメノミコト
ヒメオオカミ
齊主命
姫太神

若宮

右享保年中に神位有り正一位に叙し給ふ

撰社 元本八神殿

所祭

神皇産霊尊カミムスヒノミコト
足産霊尊タケムスヒノミコト
生産霊尊イクムスヒノミコト
御食津尊オオミケツヒコ
高皇産尊タカムスヒノミコト
足玉産尊オオミヤマノミコト
大宮賣尊オオミヤウメノミコト
事代主尊コトノミコト

星之神

*1 門番は門一ヶ所につき昼は弓の者一人に鉄砲の者一人ずつ、夜は弓の者二人に鉄砲の者四人ずつ。夜間の出入りは切手詰めにして、各人が門番所へ合印判を差し出して置き、各自の手形をもって通った。(萩市史「第一卷 229 頁以下」)

*2 愛宕堂 火伏せ、火難除けの神として崇敬された。

【73頁】

貪狼太星君^{ドシロウ} *1
 祿存貞星君^{ロクソン}
 玉廉貞綱星君^{タマケンテイ}
 破軍關星君^{ハクケン}
 土曜星君
 金曜星君
 火曜星君
 月曜星君
 巨門元星君^{コモン}
 文曲紐星君^{モンク}
 武曲紀星君^{ブクキ}
 羅喉星君^{ラコウ} *2
 水曜星君
 日曜星君
 計都星君
 木曜星君

【75頁】

神明
 神功皇后
 天兒屋根命
 天照皇大神
 天太玉命
 末社稻荷社
 倉稻魂命^{ウカクミタマ}
 命婦神^{ミヨウブシ}
 荒神
 松尾大明神
 大山咋神^{オオヤマクヅカミ} *3
 市杵嶋姫神^{イチキシマヒメ}
 神功皇后
 心神天皇
 玉依姫
 伊弉諾尊
 伊弉冉尊

今案に神系図傳云

御食津尊^{オオミケツヒコ}

神皇産靈尊^{カミムスビノミコト}

魂留産靈尊^{タマドコロ}

生産靈尊^{タマドコロ}

足産靈尊^{タマドコロ}

道反^{ミチサガヒ} 魂神^{タマノカミ}

大宮賣 事代主尊^{コトヨリノミコト}

劍之宮 司箭異魂

右司前の異魂ハ城州愛宕山守護の神社 大天狗太郎坊の相殿也 司前ハ藝州の人にして 完戸元家末子元源^{ヨシノ}

弟 深瀬家俊 後に司前と号ス 天狗と成 是完戸の庶流也といふ

社あまた有之といへとも不記候 社家ニ尋問ふへし

右郭中の内西廣小路より以外の東西の堅路に有所期^ス乃ことし

【74頁】

右八■神 八列守護験神 八齋靈神 八心府神座故式為皇帝之鎮魂神矣

御具八幡宮

間町

*1 七星 其の昔、帝釈天が阿修羅と戦ったとき、日と月を守った太歳星君(たいさいせいくん)の由来はヒンドウ教の神マリーチーだといわれている。古くは一群の風神マルトの主といひ、また創造主ブラジャーパティの一人であり、陽炎、日の光を意味する。自らは陰形、つまり姿を見せないがこの神を念ずると、他人はその人を「見ず」「知らず」「害することなく」「欺くことなく」「縛することなく」「罰することなく」という。その姿は八臂の異形であり、衆生に難が起つたときは西天摩利支天大聖に変わって戦うといわれ、あらゆる災難を排除し利益を与える存在である。北斗七星の母とされ周御王の妃の紫光夫人であり、天皇大帝、紫微大帝を生み、

貪狼星、巨門、祿存、文曲、廉貞、武曲、破軍の七星を生んだとされる。なんんたりとも、実体の無い陽炎の神格化である斗母元君には危害を加えることすらできないため、戦においては無敗の神として奉られた。別名 斗母洪恩天后円明道姥天尊。

*2 七曜と九曜 木火土金水の五惑星に太陽と月に合わせたものが七曜。七曜に羅喉星と計都星を合わせたものが九曜星。羅喉星と計都星は、インド天文学の白道と黄道の交点の星。昇交点が羅喉星。降交点が計都星。

*3 大山咋神 (オオヤマクヅカミ) 日吉(日枝)・山王信仰の祭神である大山咋神は、比叡山(日枝山)に宿る山の神(地主神)で、延暦寺の鎮護神でもある。平安遷都後の延暦25年(806)、伝教大師・最澄が比叡山の山頂に延暦寺を創建したときに、古くからこの山の地主神として鎮座していた大山咋神を寺の鎮護神としたことに始まる。そのときに大山咋神が鎮座する日枝大社を、最澄が渡つた等の天台山国清寺の山王祠という社の名にちなんで「日吉山王」と呼ぶようになり、やがて仏教風に日吉権現または山王権現と呼ばれるようになった

故天樹院の後に有 四本松と松原口筋の間に有故に
此名阿り

【76頁】

松原口の門より南へ行道路也 松原口より高句麗埵筋 北の
町 本町 南の町 無名町 等の塹筋を五町経過する 其
間の道路をさして云なり

金剛院門前通

松原口の門通りの東 大馬場の西にして 本町の中より南
至る横筋也 此地金剛院といふ密宗の寺有故ニ号す

金剛院

此町筋を二町南に行て 東側に有り 養岳院の後の北
隣也 元は門戸を北に開き南の町筋に有しを中古已来ハ
西南に開く所也 故に町の名に呼来れり
護摩堂 本尊 普賢延命

【77頁】

客殿 本尊 十一面観音大士

大馬場

東の封疆の頭に有^{ホトリ} 南北の中間四町拾六間有り 此所に
諸士會して馬藝^{ナラ}を効へり

中乃門

大場馬の東也 南北の中央に有故右此号阿り

春若口門

大場馬の北 高句麗埵の筋東に阿り 此門より封疆の
外 春若町へ出る故に此号阿李
右西廣小路より以外南北の横路也 郭中期^スの如し

嶋萩故実記全

【78頁】

四冊之内

文化五 辰十二月写

磯部権左衛門

【完】